



さよなら
カウンター

田中みやこ

夏休みを明日にひかえたの教室で私の幼なじみの悠太はポツンと

「俺には明日なんかねーよ。」

と言った。

その時は総合という授業中で（総合というのは、生徒も先生も何をしていいかあんまりわかってないぼんやりした授業のこと）、担任の牧野先生がいつものように必要以上に大きいボリュームで

「この時間は夏休みの目標や自分がしたいことの絵を描きましょう。」

と言った直後のことだった。

そんなに大きな声で言った訳でもなかったのに、悠太の言葉は何にも消し去られることなく私たちの耳に届き、その瞬間がやがやとうるさかった教室があっという間に静まりかえり、一番後ろの席の悠太に振り向いた。

隣の席の悠太を見ると、一斉にみんなの注目を浴びている本人は窓の外の運動場の方を向いてちょっとだけムスツとしているようだった。

運動場から体育の授業をする声が遠く聞こえてくる。

私の席からは体育の様子はぎりぎり見えないが、悠太からは見えているのだろうか。

牧野先生が少しあわてながらもさっきの話しを続けはじめるとすぐに、みんなは悠太の言葉なんてなかったようにわっと話し出し教室はいつも通りの空気にとけた。

牧野先生の声はさっきよりも大きくなっていった。

みんな似たり寄ったりの絵を描いた。

私も適度にさぼりながら、適当な絵を描いた。

その日の帰り道、たこ公園の前をとおりかかると悠太がブランコにすわっていた。

放課後は少年野球の練習があるはずなのに。

「悠太！」

「おー」

「野球は？」

「今日は休み・・・うそ、さぼった。」

ランドセルをおいて悠太の隣のブランコにすわる。

鎖がさびたブランコは私がすわっただけでギイとなった。

「なんかあったの？」

「なんで？」

「悠太が変だから。」

「そうだよな。俺な、」

言いながら思いっきりブランコをこいだ。

「なに？」

悠太は黙ったままだ。

まっすぐ、正面を向いてこぎ続けている。

いつまで待っても話し出さないの、私もブランコをひとこぎしてみる。

揺れるたびにびゅっとびゅっと風の音が聞こえ、ギイギイと交互に悠太のブランコと私のブランコの音になった。

これ以上こいだら鎖が切れるんじゃないかと思ったけど、私と悠太が二人で遊んでいたころもこの音がなっていたような気がする。

昔は日が暮れるまでこの公園で遊んだものだけど、悠太が野球からはをはじめたころから足が遠のいていたからブランコに乗るのなんて久しぶりだった。

私と悠太のブランコの高さがかさなったとき突然

「俺、夏休みに転校するんだ。」

と悠太が言った。

瞬間、ジージージーという蝉の鳴き声だけがやたら鮮明に聞こえだし頭の中で鳴った。

ふと下を見ると色違いのランドセルが二つ転がっているのが見えた。

毎日同じだけ使っているはずなのに、悠太のは形がつぶれて変な形をしていて、私のはまだ真っ赤でちゃんとランドセルの形を保っているのがどこかおかしかった。

何かを言わないといけない、いけない、と思ったけれど、さみしいも、さよならも、会いに行くね、も何かが違うと思った。

必死に考えた言葉は全部、私が悠太に言いたいことではない気がして、失速していくブランコに黙って乗っているしかなかった。

まだ日の沈まないたこ公園の入り口で悠太と何回目かもわからないバイバイをした。

うまく笑えているか自信がなかったけど、目の前の悠太はいつものままのくしゃっとした笑顔だった。

あと何回バイバイって言えるのだろうかなんて考えたら、あ、私今泣きそうって思ったけど、泣いたりしたら今の言葉にならなかった気持ちが全部作り物の悲しさに閉じこめられそうな気がしたから、泣くのはやめた。

そのかわりあと何年か時が過ぎたときに悠太に会うことがあったとしたら、その時は自分の心に正しい言葉をちゃんと伝えるんだ。

さよならカウンター

<http://p.booklog.jp/book/32259>

著者：田中みやこ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/2525moeka/profile>

感想はこちらのコメントへ（感想でも批判でもなんでも書いてくださいね！）

<http://p.booklog.jp/book/32259>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/32259>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.